Do!ネット
北海道生活科・総合的な学習教育連盟　情報交流誌　令和5年10月　No.68

第３１回全道夏季研修会を振り返って

後志生活科・総合的な学習研究協議会
会長　山下　秀一（余市町立旭中学校長）

この度は、道連盟と札幌地区の御厚意で、第 31 回全道夏季研修会の主管地区に札幌市とともに名を連ねさせていただきました。研修会では全道（札幌）大会指導案検討、齋藤博伸調査官の御講演と合わせて後志地区の実践発表の場も設定していただき、大変貴重な学びの機会をいただきましたことに心から御礼申し上げます。

全道大会の指導案検討会は、本研修会が夏季開催となってからの目玉の一つであり、今回もオンライン参加・参集されたどの方も、個別最適な学びと協働的な学びの充実を通じて「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、具体的実践（指導案）について熱い思いで語り合うとても有意義な場となっていました。同様に後志地区の未来を担う若い二人の実践発表に対しても、それぞれの立場で「生活科」「総合」に真剣に向き合っている皆さんから、「教師自ら地域（まちづくりプラン等）に目を向ける大切さ」「必然性や主体性を大切にした学びとは」「探究課題と育てたい資質能力の明確化」等、根本的・本質的な多くの御指導・御助言をいただくことができました。

中教審答申(R4.12.19)「『令和の日本型教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」には、「新たな教師の学びの姿」について次のように記載されています。

> ●変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという「主体的な姿勢」
> ●求められる知識技能が変わっていくことを意識した「継続的な学び」
> ●新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した「個別最適な学び」
> ●他者との対話や振り返りの機会を確保した「協働的な学び」
> （抜粋）…個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じて、「主体的・対話的で深い学び」を実現することは、児童生徒の学びのみならず、教師の学びにも求められる命題である。つまり、教師の学びの姿も、子供たちの学びの相似形であるといえる。…

教科等横断的なカリキュラムマネジメントの軸として、単元開発を通した改善・充実が求められる「生活科」「総合的な学習の時間」の実践は、社会状況、学校・地域・子どもの実態や関わる「人・こと・もの」によって多様であり、答えが一つとは限りません。

ですから、本連盟の研究は、新たな知見を生み出すために、会員一人一人が自分事として、主体的・対話的に深く学び合いながら、子どもにとって最適であり、誰もが納得できる根本的・本質的なものかどうかを問い続けています。

今年度全道研究大会札幌大会 10/6・7 も各地区のノウハウ・人材・英知が結集され、より深くつなぐ、つながる、つなげる、実り多い大会となることを祈念いたします。

第 31 回全道夏季研修会

〇期日　　令和５年(２０２３年)7 月 29 日（土）１０～１４時

〇会場　　① ホテルライフォート札幌（札幌市）

　　② 全道各地区からオンライン

〇主催　　北海道生活科・総合的な学習教育連盟

〇共催　　日本生活科・総合的学習教育学会北海道支部

〇主管　　札幌市生活科・総合的な学習教育連盟

　　後志生活科・総合的な学習研究協議会

〇日程　　９：３０～１０：００受付・接続

　　１０：００～１０：１０開会式

　　１０：１０～１１：１０研修Ⅰ（全道大会指導案検討会）

　　１１：１０～１１：２０休憩

　　１１：２０～１２：００研修Ⅱ（後志地区実践発表・協議）

　　１２：００～１２：５０昼食休憩

　　１２：５０～１３：５０講演会

　　１３：５０～１４：００閉会式

〇講演会　　講師：文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

　　齋藤　　博伸　氏

　　※齋藤先生にはオンラインでご参加・ご講演いただきました。

〇会費　　一般１，５００円（学生無料）

〇その他　　参加者にはできる限り参集をお勧めし、オンライン参加も可能とするハイブリッド形式開催

研修Ⅰ－1　全道大会指導案検討（生活科）

２年生活科「目指せ！生きものはかせ」

授業者　大嶋　悠基　教諭（札幌市立円山小学校）

１．授業者より

主体性を育むために、多様な生き物を一年を通して育てる経験ができるよう環境を整えることを大切にしてきた。生き物の世話は、朝活動や休み時間を利用し、子どもたちが自ら行動できるよう保障している。このように、主体的な活動を支えてきたことで、子どもたちは思い思いの研究ノートを作り、そこに調べたことや分かったことを書きためている。また、月２回「生きものタイム」の時間をとり、日頃の気付きや疑問点、知識を出し合い、様々な経験を生かした思考・判断につながる学びとなるようにしている。今後は、自分たちで解決できない問題点を円山動物園の方に聴く機会なども予定している。

２．意見交流

参会者の方々からは、以下のような質問が出されました。

①一つの対象に繰り返し関わり愛着をもたせる学習が多かったが、これだけ多様な生き物を扱う場合の研究の視点との関わりを知りたい。

②生き物の種類を広げることにより、子どもたちの気付きはどう深まるのか。何をもって気付きの質を高めるのか。

③生活科としてどのような表現（アウトプット）を考えているのか。研究ノートをどう生かしていくのか。

質問に対して授業者からは、以下のようなお話がありました。

①多様性を高めることで、一人一人の子どもたちに応じた主体性や愛着を高めたいと考えている。

②「生きものはかせ」になるために、自分たちで解決しようとする姿やそれぞれに合わせた飼育の仕方を考えることで、経験を生かした気付きの質の高まりにつながる。子ども目線で気付くことが大切であり、「生きものってこうなんだ。」と語らせたり、自分との違いや生命の不思議さに気付かせたりしていきたい。生き物が多種類あることで個々の思いに合わせることができ、個別最適な学びにつながる。また、個々の気付きを交流することで協働的な学びが生まれ、類似性を見付けたりそれぞれの特性に合わせた飼育方法を工夫したり経験を生かした気付きの質が高まったりする。

③研究ノートは子どもによって書く内容や量に差がある。タブレットのムーブノートを活用し、カテゴリ別にノートを写真撮影して載せ、互いに見合ってコメントを付け合っている。また、「生きものタイム」で発表し合うときに活用したり、生き物日記をつけたりしている。子どもの思いや願いに沿ってその都度表現していく積み重ねを大切にしている。最後の表現は検討中で、子どもたちの思いを生かしながら、「一年生に紹介する。生きものはかせになれた実感を発表する。」など、一年間を振り返り自分たちの成長を実感する時間にしたい。研究ノートやムーブノートは、授業の理解だけでなく協働的な学びにするための手立てとして考えていきたい。

３．まとめ

グループトークを行い、少人数で活発な意見交流をした後、その内容を全体で交流した。「多様な生き物を飼育することのよさと課題」「生き物を飼う必然性について」「個別最適な学びから協働的な学びへどうつなげていくか」「研究ノートを他者と比較して自己内対話を促したり、生き物日記をスピーチに変えたりするなどの手立て」「評価規準を分かりやすくするための選定について」など、たくさんの意見が出され、今後指導案を考えていく上で大変参考になると同時に、研究内容にもつながる有意義な話し合いとなった。

（平岡南小学校　内田　宏子：文）

研修Ⅰ－2　全道大会指導案検討（総合的な学習の時間）

６年総合「なんだろう、なんだろう」

授業者　竹次　奈央　教諭（札幌市立円山小学校）

探究課題：実社会で働く人々の姿と自己の将来（キャリア）

○キャリアについて

・総合でキャリアを扱う場合は、中学校進学に焦点を当てすぎたり、仕事や職業について焦点を当てすぎたりすると、ねらいが達成できなくなる場合があるので、バランスを大切に単元を構成するとよいというご意見をいただきました。

⇒働くことについて調べたり考えたりするのは、自分を知るためであるという捉えを大切に、単元を構成していきたいと思います。

○自分を知ることについて

・自分を知るということは、自分に合った職業を見付けるということではないというご意見をいただきました。

⇒自分を知るということは、自分の特性や強みを見付け、自信をもったり、自分に足りないことをはっきりさせて自分を伸ばしたりしようとすることと捉え、しっかりと主張していきたいと思います。

○「自分って、なんだろうシート」について

・「キャリアパスポート」と「自分って、なんだろうシート」との関連を整理しておく必要があるというご意見をいただきました。また、「自分って、なんだろうシート」の記入にあたり、たくさん書けている子どももいれば、あまり書けていない子どももいるという点を踏まえ、どの子どもも参加できる総合の授業を大切にしてほしいというご意見もいただきました。

⇒友達やゲストティーチャーなどとの関わりを通して、「自分って、なんだろうシート」を更新できるようにしていきたいと思います。

○ゲストティーチャーについて

・様々な職種の人と関わることはもちろん、「小学生の頃に思い描いていた夢に向かって進んできた人」「紆余曲折ありながらも夢をかなえた人」など、自分との向き合い方にも多様性があると面白くなりそうというご意見をいただきました。

⇒ゲストティーチャーにも「自分って、なんだろうシート」を書いてもらうことで、その人の特性や強みなどにも気付けるようにしていきたいと思います。

○その他

・単元全体として「個別最適な学び」や「課題探究的な学習」の要素が多いので、「協働的な学び」についても意識を向けると、深まりが生まれるのではないかというご意見をいただきました。

・文末表現を「～している。」に統一するなど、評価規準の文言について精査するとよいというご意見をいただきました。

皆様から頂いたご意見を基に、子どもたちにとって実りのある学びとなるよう、授業づくりを進めていきたいと思います。ありがとうございました。

（札幌市立藻岩小学校　山下　祐太：文）

研修Ⅱ－1　後志地区　実践発表①

「日常」と「たい」を大切にした生活科・町探検の授業実践

福　一紀　教諭　（倶知安町立倶知安小学校）

２年生町探検の単元の実践について『「日常」と「たい」を大切にした授業づくり』と題し、授業実践の発表を行いました。

指導者側からの『～しな「さい」』という、子どもたちが受動的になるような授業から、指導者側の工夫により、子どもたちが主体的に『～し「たい」』に向かえるような授業への転換を、日常的に実践してきました。その中で、今後どのように生活科の町探検の単元を進めていくのが大切か、協議・検討をしていただきました。

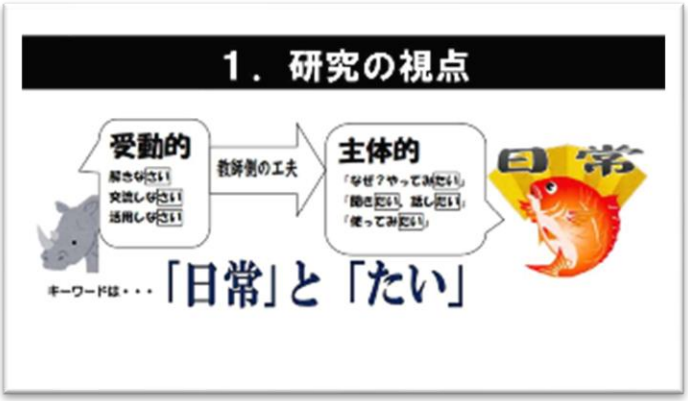
発表者は、導入・探検・交流の各場面で、児童に「たい」を持たせるような工夫を意図的に取り入れました。導入では『調べ「たい」』という気持ちを持たせることができるよう、倶知安町にある建物を提示したり、ＩＣＴを活用してプレ探検を実施したりして、次の町探検へのフェーズへ繋げました。

１回目の町探検の場面では、『行き「たい」』を意識し、３つの方面（駅、病院、ショッピングセンター）に分かれ、それぞれの方面の「代表」として意識して探検をするよう進めました。探検の際、子どもたちはこれまでに見たことがある建物も見たことがない建物も興味・関心をもち、この後に控える発表会のために情報を集めていました。

交流の場面では、行ってない子に『伝え「たい」』と必要感が生まれるように改めて声かけを行い、発表スライドを使い、見つけたお店や施設を紹介する準備をしました。準備の中で、『伝え「たい」』という思いが子どもたちの中から湧き出て、「よりわかりやすく発表するにはどうしたらいいか」「見やすいスライドを作るにはどうしたらいいか」など、子どもたち同士で協働する様子が見られました。１回目の発表会では、これまでに準備したスライドを用いて全員が発表しました。発表後は、「友達の発表していた場所を詳しく調べてみたい」との声が上がり、『伝え「たい」』を意識した交流により、２回目の町探検に繋げることができました。

秋に実施する２回目の町探検では「ひみつ」をキーワードにして、子どもたちが主体的に施設やお店の「ひみつ」を調べていく予定です。「場所のひみつ」「人のひみつ」「仕事のひみつ」の３つを調べていく中で自分との関わりを見つけたり、地域の様々な人々へ親しみをもてたりすることができるように、活動を進めていきたいと思います。

（倶知安町立倶知安小学校　福　一紀：文）



研修Ⅱ－1　後志地区　実践発表①についての討議

司会：道研究部長・札幌市立川北小学校　小山　恒　教諭
講評：大空町立東藻琴小学校　大西　篤　校長先生

討議

・質問として、「なぜ、２回目（たんけん）に行くのかの、しかけは？」「何のために、「ひみつ」を見つけてくるのか？」とあり、話し合いの視点にもなりました。
・福先生からは、「１回目で深められなかった気づきを高めさせたい！」との回答があり、そのための具体について参加者から、リレー方式で途切れることなく意見が続きました。
・主な意見として～

「目標にある、自分との関わりを見つけていけるように、掘り下げていく必要がある。子どもたちの目標は、自分が直接聞いた話や質問に対する回答をもらうことが目的になるが、教師としては、子どもたちの自分との関わり方を大事にさせることが目的になる」

「「ひみつ」は、自分にとってのひみつなのか、お店のひみつなのか。また、それを絞りすぎると子どもは困るが、絞らないと発表の時に空中分解してしまう」

「生活科は、事前に教師の方でどれだけ種を蒔き、あたかも子ども自身が自分で気付けたようにすること、教師の手のひらで転がすことが重要」

「子どもたちは、人の発表は聞きたがらないし、２回目の発表の時にはパワーダウンすることが多い。「ひみつを知ってどうするのか？」といった目的意識やどうアウトプットするのかが重要」

「教師のリサーチ力、下調べ、そして、どこに注目させたいのかの見とりが大事」

等、２年生の生活科の定番である「まちたんけん」ならではの実践に裏付けられた貴重な意見（体験談）が続きました。

講評（大空町立東藻琴小学校　大西　篤　校長）

・「〈～たい〉から〈～なければならない〉へ」「わかったつもりを、わかったにする」「必要感のある学びへ」といった、育てたい資質・能力を明確にすることの重要性についてお話をいただきました。
・必然性のある学びの仕掛けとして、ゲストティーチャーの力を借りて、外部からの「お願いしたい」といった働きかけをしてもらうことで、「体験したい」＋「表現したい」の一体的な充実が図られるといったご助言もありました。
・また、学習指導要領を読み込むこと、町の「まちづくりプラン」等も参考にしながら、〈まちの魅力〉に気付くことができる子どもの育成を目指してほしいといった激励も含めて、たくさんのご指導・ご助言をいただきました。

（共和町立東陽小学校　西岡　健幸：文）

研修Ⅱ－2　後志地区　実践発表②

「総合的な学習の時間」小中連携の取組事例

土岐　龍大　教諭（黒松内町立黒松内小学校）

提言黒松内町の「総合的な学習の時間」小中連携の充実の実践例

黒松内町は「ブナの北限」であることから、この「ブナの木」を中心のテーマとして、「黒松内町のひと・もの・ことに触れる探究的な学習を通して，問題を解決する力を育成し，自己の生き方を考えること」をねらいに、黒松内地区の小中学校の総合的な学習の時間を「ブナ里学習」と名付けを行っています。

「ブナ里学習」は、ふるさと黒松内町の「森・川・大地・文化・産業など」について７年間の学びを系統立てた単元構成にすることで、身の回りの事象を自分事として捉え、自己の生き方と関連付けて考え続ける生徒の育成を目指しています。また、地域（ふるさと）学習とキャリア教育との関連が図られるよう構成されていて、中学校で取り扱う内容は、小学校での学びを生かし、キャリア教育の要素が強くなっていきます。

小・中学校それぞれの年間計画には、互いの学校（学年）の単元名などが記載されています。毎年、担当者同士での打合せや、小中連携ミーティングなどで、内容等について随時確認・修正を行っています。

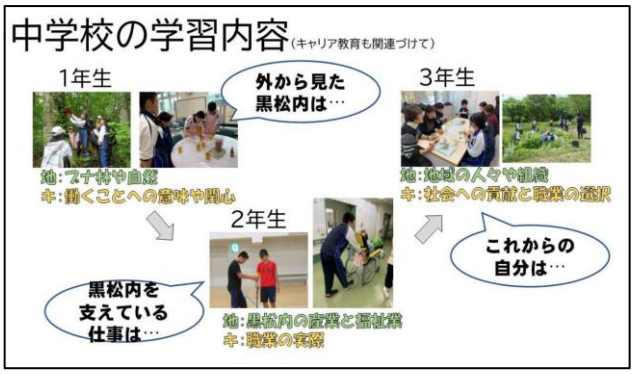
この他にも、小中の繋がりが常に意識されるように、共通のポートフォリオを使用し、次学年へ引き継ぐようにています。また、１年間の学習の成果を発表する場、「ブナ里発表会」では、小学校と中学校の児童生徒が互いの発表を見合えるようにしています。

黒松内小学校では、「学習内容系統表」を作成し、スタートとゴールのつながりを意識した計画のもと、学習を進めています。こうすることで、担任が変わっても、それまでの学びを生かしながら、途切れることなく学習を展開することができます。

学びをつなげていくために留意していることは、学習のゴールは、大枠で設定しておくという点です。子ども一人一人の興味・関心や実態に応じ、学習者主体の展開を重視するため、探究のスパイラル「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・発表」それぞれの場面でファシリテートしていくことを大切にしています。

また、教師が学年の前後の学びの繋がりを意識することも留意しています。学習を通して、探究的に学ぶことのよさを実感したり、自分の見方・考え方の変容を実感したりすることを大切にし、活動・発表することが目的とならないよう気をつけています。

（黒松内町立黒松内小学校　土岐　龍大：文）



研修Ⅱ－2　後志地区　実践発表②についての討議

司会：旭川地区研究部長・北海道教育大学旭川小学校
小原　広士　教諭
講評：旭川市立高台小学校　玉井　一行　校長先生

討議

後志地区は、黒松内小学校の実践の取組について、土岐先生から実践発表を行いました。黒松町では、学術的な価値の高さから昭和３年には国の天然記念物に指定されたブナ林を中心として、「ブナ里学習」について作成された全体計画が組まれ、さらに小学校、中学校でも連携した総合的な学習の時間について説明が行われました。

全体計画の中にも小中の連携ついてしっかり記載され、全体計画以外にも共通のポートフォリオを活用し、ブナ里学習発表会の見学が行われるなど、各学年のつながりを見通した学習展開について説明もありました。

話し合いの中では、全体計画の見直しがどのような頻度で改訂されているか」、また、「系統立てた計画による窮屈さや児童生徒から、毎年行われることから取組への期待感が薄れていく恐れはないのか。」など様々な意見をいただきました。他にも、「課題の目標は、教師が決めるのか、児童生徒が決めるのか。」「資質能力は系統立てているのか。」など具体的な質問もありました。

土岐先生からも、毎年新たな課題や発見をする工夫をしていることや児童生徒の実態や資質能力についても新たに取組をしてみようという次年度からの建設的な回答がありました。

講評

黒松内小学校の総合的な学習の時間は、つながりや系統性を活かしている全体計画であることや、持続可能な学習課程が組まれているというありがたい言葉をいただきました。また、地域とともに作っていける学習内容であることや、ふるさと発表会があることによって、小学校６年生が中学生に憧れをもつことができる取組になっているということについてもふれていただきました。

最後に、めざす資質・能力についても、系統立てて探求課題を設定しておくことによって、さらにわかりやすくなるのではないかというご助言もいただきました。

（岩内町立岩内西小学校　池田　健二：文）

第３１回全道夏季研修会　講演会（オンライン）

【ホテルライフォート札幌】令和５年７月29日（土）13：00～

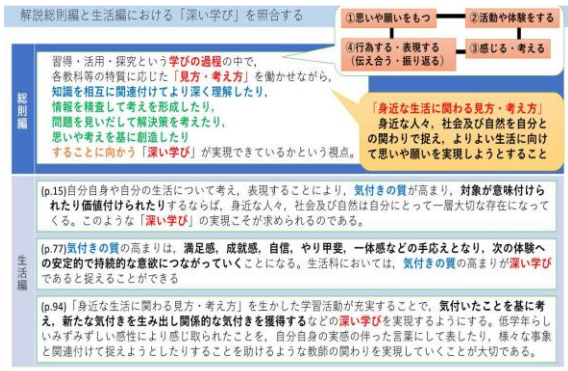
「生活科と総合的な学習の時間への期待」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
齋　藤　博　伸　氏

令和５年全道夏季研修会講演会の講師は文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の齋藤博伸先生です。講演会は午後からでしたが、斎藤先生は午前の指導案検討会や実践発表もご覧になり、「生活科と総合的な学習の時間の充実と期待」というお話の中でその講評もいただくことができました。講演会では豊富な資料をご提示していただき前半は生活科のことについて後半は総合的な学習についてお話していただきました。

前半生活科では幼保小連携についてスタートカリキュラムのお話をしていただきました。スタートカリキュラムを園と協力して作っている学校が全体の３０パーセントということを聞いて、７０パーセントの方に入ってしまっている自校のスタートカリキュラムもしっかり連携を考えて作り直していかなければならないこと、理科など他教科とのつながりや学校全体のカリキュラムをスタートカリキュラムの見直しをしながら進めていかなければいけないと思いました。ここ数年はコロナ禍で交流ができていなかったり、交流のノウハウがなくなっていたり、どちらかといえば小中一貫にエネルギーが傾いていたりとスタートカリキュラムがあっても、本当の意味で共有されずということがありましたが、子どもたちが入学前に身に着けてきた１０の姿を意識し再度スタートカリキュラムを見つめなおし、次年度に向けて作っていこうと思いました。結節点としての生活科を意識していきたいと思います。

後半総合的な学習のお話をしていただきました。総合的な学習については本校の今年度の総合的な学習の計画を春にまとめたところでしたので、それを思い出しながら「探究的な見方・考え方」「縦のつながり」「子どもたちの取組が地域に伝えられる」「PDCA サイクル３回転ぐらい」というお話を伺い、自分が「できていない。」「やっていない。」「理解されていない。」という反省が多くありました。そして自校のカリキュラムの改善の必要性を実感しました。「SDGｓと総合的な学習は親和性が高い」というお話の時は自校でもＳＤＧｓをテーマにしていることを思いつつ、「何について学ぶか」「どのようなことができるようになるか」をはっきりさせて探究していくことの大事さを感じました。



オンラインならではの途中若干のリーズの時間がありましたが、豊富な資料提示と斎藤先生の優しい語り口にあっという間に時間が過ぎていきました。これからのためになる有意義な時間でした。自分の学校のカリキュラムを見つめなおし、子どもたちが楽しく主体的に学べるようにカリキュラム改善に努めていこうと思います。

（札幌市立南郷小学校　荒木　さとる：文）